

# 大人が絵本を 第11回 駒形



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子\*

小児歯科医師 濱野 良彦\*\*

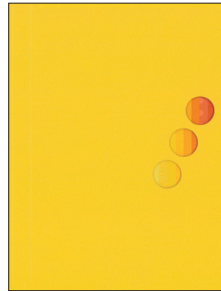
\* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ヒブリオキッズ(福岡市)  
\*\* 医療法人元気が湧く 理事/ファウンダー

## グラフィック・デザインブックの世界

黄色が目眩しいこの絵本は、グラフィック・デザイナーで、造本作家の駒形克己氏の『YELLOW TO RED』です。



『YELLOW TO RED』  
(ONE STROKE)



鮮やかな黄色の表紙に開いた3つの穴から見える赤色のグラデーションが見る者を誘っているかのようで、思わずその穴に指を突っ込んで黄色い表紙を開くと、これまた黄色いひよこが飛び出して現れ、物語世界へ導いてくれます。同系色であっても濃淡による変化をみせ、紙のざらつきやつや感、滑らかさなど様々な質感の黄色と赤色の紙が使われ、それらの手触りを味わうことができます。読む者は、色と紙が語る世界を視て感じ、言葉やめくる紙の音を聴き、紙それぞれの質感を指で感じて、さらに紙のにおいや物語世界のにおいを感じ、作品が持つ世界を知覚の総体で受け止めることができます。絵本の分野では、駒形氏は紙の魔術師と認められています。紙の素材が、絵と物語世界を効果的に表現する技法は氏のグラフィック・デザイナーとしてのこだわりと言えます。

駒形氏の絵本は、どの作品も表紙、見返し、扉、そして各ページ構成、裏表紙に至るまで、一冊丸ごとが美しいデザインとして表現されています。ヴィ

ズイットな色使いと添えられた短い言葉、1枚1枚のページの紙質まで、表現にかかわるすべての細部に、グラフィック・デザイナーとしてのセンスがちりばめられています。これら「紙の絵本」シリーズ(全4冊)は、そのセンスを見事に集結させた逸品です。



## 造本作家・駒形克己

1953年生まれの駒形氏は1977年渡米後、ニューヨーク CSB 本社などでグラフィック・デザイナーとして活躍しました。帰国した3年後の1986年に ONE STROKE を設立し、カード絵本『リトル・アイ』全10巻(偕成社)や『ぼく、うまれるよ』などを始めとした、それまで絵本とは考えられなかったような作品を次々と発表してきました。1994年からリヨン、パリ、ジュネーブなどを巡回して個展とワークショップ活動を行い、1997年、東京の青山子ども城を皮切りに全国各地で「KOMAGATA WORLD」を開催しました。それらの仕事はニューヨーク ADC 銀賞、2000年・2010年ボローニャ国際児童図書展 RAGAZZI 賞優秀賞、2006年ユニバーサルデザイン賞(九州大学病院小児医療センター病棟の環境デザイン)など世界的に評価されています<sup>1)</sup>。そして2012年、当館「絵本と図鑑の親子ライブラリー」施設を総合プロデュース、マスコットのペンギンを誕生させて



『リトル・アイ シリーズ』  
第1巻『FIRST LOOK』  
(偕成社)



# 手にするときは！

## 克己の世界

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

くれました。

世界各国で開催しているワークショップでは、原色を中心とした様々な色、シャープな形、予想を裏切るような意外性で子どもたちの感性を刺激するプログラムとなっています。見る・触る・予想するなどの直感的な体験が、子どもたちの五感を刺激し、好奇心を触発するのです<sup>2)</sup>。このコンセプトは、駒形氏の絵本そのものです。見て、触って、ページをめくったときの驚きや感動が、子どもから大人まで読む者の五感を刺激し、感性に訴えかけてくるのです。

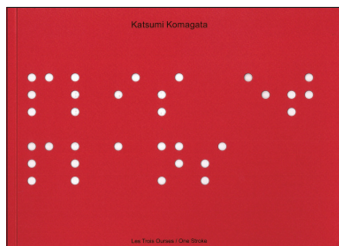
乳幼児期に五感で絵本を楽しむ経験をたっぷりと重ねていたなら、一時期絵本を離れたとしても、幼少期にしみついた絵本を楽しんだ記憶は蘇ってくることでしょう。

### 個性って、何だろう？

駒形作品は紙質のこだわりや色使いの他にも様々な特徴がありますが、丸い穴の型抜きを使う手法もよくみられます。



『折ってひらいて』  
(ONE STROKE)



ざらざらした赤い紙の表紙に、直径8ミリほどの穴が、規則的とも不規則的とも受け止められる間隔で並んだ本は、『折ってひらいて』で「視覚障害者も健常者も共有できる」<sup>3)</sup>一冊です。パリ近代美術館、ポンピドー・センターのディレクターで、アーティ

ストでもあるソフィ・キューティル氏が、「視覚障害者と健常者が共有できる本」のプロジェクトに駒形氏の参加を呼びかけ、2003年日仏同時出版となりました。仏版のタイトルは『PLIS ET PLANS』(プリエ・プラン)で、日本語に訳すと「折りと平面」といった意味合いになります<sup>3)</sup>。

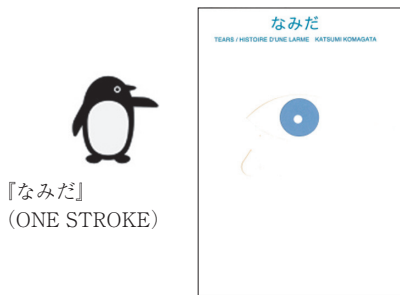
日本版の背タイトルにはこの仏タイトルと著者名のみが表記され、表紙に日本語表記はなく、中表紙を開いて初めて日本語タイトルが表れます。ページは二つ折りになっていて、二枚重ねの上の紙には切り抜き窓が開けられており、そこから下の紙の色をのぞかせています。折られたフラップを開いたり伸ばしたりすると、形が変わっていき、小さな丸が大きな丸となったり、折り畳まれた正方形が長方形になったりと、それまで見えなかった形が出現するような仕掛けになっています。

本書は視覚障害者向けの本ではなく、視覚障害者と健常者が共に触感を味わい、折ったり開いたりする楽しみを共有する一冊です。目が見えない人は、見える人よりも感覚が澄まされているといいます。目の見える子どもたちにはこの作品を、目をつぶって触感で感じてほしいと思います。子どもたちの内面に潜む豊かな感性が解き放たれ、創造する喜びを感じることができるでしょう。また、子どもたちが地域において個性を大事にし、様々な個性を持った友達との交流の大切さを感じるきっかけとなる本ですので、そういったきっかけを小児歯科医院が作ることで、地域の中での歯科医院の役割を果たすことができると考え、私たちは医療文化として活動しています。



## 作者、登場人物、読み手が対等な物語

ざらつき感のある白い紙に型抜かれた青い目と、その目から落ちる型抜きの涙、シンプルだけどインパクトの強い表紙の『なみだ』は、この表紙だけでワクワクしてしまいます。これは「創作絵本」シリーズ3部作の一冊です。



『なみだ』  
(ONE STROKE)

本書は、物語の視点が複数の主人公によって伝えられるというスタイルで、駒形作品のひとつの特徴でもあります。通常、主人公となる者が描く物語に、その他の登場人物が脇から盛り立てた構成が一般的です。『なみだ』は、「ともだちとけんかした」子どもの流した涙が旅する物語なのですが、やがてその涙は犬の涙となりアリの涙となり、それぞれの物語を紡ぎます。

このように、複数の異なる動きの聲が協和しあって物語が進行する手法をポリフォニーと言います。つまり、主人公や脇役といった役割配置ではなく、複数の登場人物や事物が、それぞれ独立して物語を生きるというコミュニティで構成されているのです<sup>4)</sup>。複数の主人公が存在する物語とも言え、それぞれのエピソードが同時進行するのです。作者も登場人物も、そして読み手も対等になるのです。ポリフォニーなコミュニティは、物語がコントロールされおらず、読み手の想像によって様々に広がりを見せられます。そのような自由性を持つ物語を読むということは、読者が解放的になれる癒し的な物語ともなります。

駒形氏の作品は紙の温かみと、ポリフォニーなコミュニティから癒しを持った絵本なのです。

## 紙が織りなす生命のお話

もう一冊、紹介します。生命誕生をテーマにした『ぼく、うまれるよ!』は、紙質のもつ表現効果が前面に出された絵本です。



『ぼく、うまれるよ!』  
(ONE STROKE)

受精、細胞分裂、着床、羊水の中の胎児といった出産までの成長過程が、オレンジ、ピンク、赤など暖かな色と何種類もの特殊紙を用いて表現されています。ご自身のお子様の出産に立ちあったときに、へその緒を見たことがきっかけで生まれた作者初めての絵本です。出産のメカニズムを文献で調べ、科学的に胎児の生命力を知ったときに、らせん状の紙をへその緒に見立て、場面によって異なる紙質や色を使った生命の絵本が生まれたのです。自ら生まれようとする生命の不思議と力強さが感じられます。初版は1995年9月で、1999年4月に改訂版が出版されているのですが、駒形氏のイメージと表現効果によって、改訂版では初版と異なる用紙変更がなされました。もっともわかりやすいのは表紙で、オレンジのツヤのある紙から、白いややでこぼこした紙に変更し、手に感じる紙の温度を変えることで、母親の温もりや暖かさを表現し直したのです<sup>5)</sup>。

母胎や出産の神秘を父性の立場から、温かみと繊細さ、そして力強さを表現しきっているのです。デザイナーとしての発想や表現技法には驚きの連続なのですが、何よりも父親としての立場から、出産を

科学的に探究した上で小さな子どもにも理解できる絵本として表現した駒形氏の姿勢に感服します。

「生命について考えよう」などと、かしまって読むのではなく、お母様とお子様で自然体で読みあってほしい作品です。幼稚園児、小学生、中学生、高校生それぞれの年代で感じ取れること異なるでしょう。お子様がその時々で生命や家族、自分について見つめることのできる「生命のお話」です。産科や小児科はもちろん、子どもたちの集まる小児歯科にも置いておきたい一冊です。

### 小児歯科医院で五感を刺激する

駒形克己氏の作品は色彩の鮮やかさが特徴的ですが、特に、シンプルなのにインパクトのある表紙は見ただけでワクワク感が高まり、表紙を開かずにはいられない衝動に駆られてしまいます。各ページで演出される仕掛けは、一冊の絵本それ自体がまるで舞台のようです。さらに、様々な紙質を指先で感じながらめくる行為は、身体性との結びつきが意識されて創られた絵本なのです。

綴じられたページを順にめくり、物語絵本を楽しむことも大切ですが、時には駒形作品のようなアート絵本に触れて、五感を刺激し、感性を磨くのもまた大切なことです。

歯科医院の待合室に一冊、駒形作品を置いて子どもたちの感性を刺激してみませんか。



「ビブリオペンギンに会い、遊びに来てください。」

### 文献

- 1) 藤田千彩：駒形克己－プラスの発想・マイナスの構成、美術手帖, 59(901), p.131-136, 2007
- 2) 下村一：「遊び」と「ワークショップ」－こどもの城、駒形克己：9つの色, ONE STROKE, 東京, 2004, pp.46-48
- 3) 駒形克己：視覚障害者へ向けた本づくり。oUVRe(ウヴル), No.2, p.48-53, 2003



絵本と図鑑の親子ライブラリーが開催した「K. KOMAGATA ワークショップ」



- 4) 中川素子, 他 編集：絵本の事典, 2011, p.380
- 5) 中川素子, 他：絵本の視覚表現, 日本エディタースクール, 東京, 2001, pp.195-198

### 紹介した駒形克己の絵本

- 1) YELLOW TO RED(「紙の絵本」シリーズ), ONE STROKE, 東京, 1994
- 2) BLUE TO BLUE(「紙の絵本」シリーズ), ONE STROKE, 東京, 1994
- 3) ほしがねむるところ(「紙の絵本」シリーズ), ONE STROKE, 東京, 2004
- 4) かぜがはこぶ おと(「紙の絵本」シリーズ), ONE STROKE, 東京, 2004
- 5) リトル・アイ シリーズ(全10巻), 偕成社, 東京, 1990～1992
- 6) ほく、うまれるよ!, ONE STROKE, 東京, 1995
- 7) 折ってひらいて, ONE STROKE, 東京, 2003
- 8) なみだ(「創作絵本」シリーズ), ONE STROKE, 東京, 2000
- 9) PACU PACU(「創作絵本」シリーズ), ONE STROKE, 東京, 2000
- 10) かけら(「創作絵本」シリーズ), ONE STROKE, 東京, 2000